
歩く仲間

ノダメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歩く仲間

【Nコード】

N7355A

【作者名】

ノダメ

【あらすじ】

突然あらわれた幻の世界。そこに住む、少年リドルは、ちょっとかわった少年。リドルは、自分の部屋で幽霊と出会う。幽霊は、自分の足で歩いてみたいと願い泣いた。そして、歩くことができるように二人は、旅にでます。

第一話 イムル

突然、どこか遠くに行った様な気がする時は、ありませんか。

そう、あなたは、行ったのです。幻の世界、

「アームス」
へ。

アームスには、四つの国があります。

人間の住む

「イムル」

、幽霊が住む、

「モンク」

、天使の住む

「スズク」

、悪魔の住む

「ドーゲル」

がある。

国と言っても小さな世界なので村の様なものです。

ただ、四つの国は、とても近いのに、人間には、他の国の人々を見ることができないのです。

たった一人の少年をのぞいては。ここは、イムル。

町の中心にある緑の屋根の家に少年は、父と二人で暮らしていました。

少年の名前は、

「リドル」

、ちょっとかわりものです。

ある日のことです。

リドルは、父のビングと農作業をしているとリドルが変なことを言い出したのです。

「ねえ、父さん。イムルってさあ人が少ないってみんな言うけど、多いよね。まあ、ほとんど足がないけどね。」

それを聞いてビングは、リドルにゴツンと大きな音をたててげんこつした。

「またおめえは、そっだらくだらないこというて、どうみたっていいいべ。勉強しねえから、そったら夢みたいなこというんだ。もっとおつむがよくなるように勉強しろ。」

そう言ってそそくさとビングは、家の中にはいつていきました。

リドルも、ジンジンふくれた、たんこぶを気にしながら頭をさすり、家の二階の自分の部屋へと帰りました。

第一話 イムル（後書き）

初めて書いた連載小説です。みぐるしいところも、あるとおもいますがよろしくおねがいします。

第2話突然の来客（前書き）

イムルに住むリドルは、すこし変わった少年、人には、見えないものが見えてしまう。

いつも父ビングにそれをいつては、怒られてしまう。

その日、部屋に戻ってリドルの見たものは・・・

第2話突然の来客

自分の部屋に入ると、見たこともない男の子が泣いていました。

リドルは、びっくりして、

「わぁーだれだよ。なんで僕の部屋にいるの。どうやってはいつたの。足ないし、幽霊なの。」

リドルは、すごいパニックを起こして、いっぺんにいろんなことを言ってしまいました。

すると、男の子は鼻をすすりながらに、頬を赤く染めて口をとがせ「幽霊って言うな。僕には、れっきとした、ストックと言う名前があるんだ。」

それに、ぼくらの世界では、足がある君の方こそ幽霊だ。」

それを聞いたリドルは、ムっとしました。

「なんでも、いいけどさ、ここは、僕の家だからでいてってくれないかな。」

すると、ストックは、

「いやだ。僕のおねがいとさっきのことあやまるまでは、絶対いかないよ。」

つと二人話していると、ドアの向こうからビングが

「リドル、そこにだれかいるのか。」

リドルはストックの顔を見ながら

「ううん。だれもないよ。僕、疲れたから先に寝るよ。おやすみ。」

するとビングは

「そうか。おやすみ。」

つと言いながら 居間のほうへ戻っていきました。

リドルたちは、クスッと笑っていましたが、すぐに、われにかえっ

てにらみあいになりました。

我慢しきれず、先にリドルが口をひらきました。

「わかった。ごめん。話を聞くからとりあえず家をでよう。」

ストックは、ドアをみながらうなずき、二人は、月の光がてらす窓をあけ、家をでました。

第2話突然の来客（後書き）

ストックがでてきました。

今後いろいろな人がでてきますのでたのしんで読んでください。

第3話小麦畑の出会い（前書き）

リドルは、ビングにばれないようにストックの話を聞くため夜の町をでるとそこには・・・

第3話小麦畑の出会い

二人は、お互いに心の中はぐるぐると複雑な気分で、月明かりの道をストックはフワフワとリドルの歩調にあわせて空を飛びリドルは歩いて町の外にでました。

町の外には、月の光が照らし、まばゆい光をはなつ黄金の小麦畑がありました。黄金の小麦畑を前に、二人は息をのみ、互いに、
「なんてきれいなんだろう。」

つとつばやき、顔をみせあうと、ニヤリと笑い、ワーっと小麦畑をめぐらしてリドルは走り、ストックは、飛び込みました。

「なんだ、ただの小麦じゃん。だれかさんがきれいとか言うからからてつきり黄金だと思ったのに。」

がっかりして肩を落としたリドルが言いました。すると、

「リドルだつて言ったじゃないか。それに、走り出したのはリドルの方が先だよ。」

ストックは、鼻をツンつとあげ、リドルにせまりました。

「なつ。まあいいや。ここならだれもこないし、いいかな。それで、君のおねがいつてなに？」

リドルは、怒りをぐつとこらえてストックの話に耳を傾けました。

「僕、人間のように歩いてみたいんだ。リドルは、僕のこと見えるし人間は、なんでも作ってしまうって聞いたから。」

思いつめた表情のストックにリドルは、

「僕には、君が理解できないよ。君は、空が飛べるのにいろんなものが見えるのになんで歩きたいんだ。僕の夢は、空を飛ぶことそれをもっている君がうらやましいよ。」

二人が、思いつめてうつむいていると

「暗いな。そんな夢があるならお互いになえちゃえばいいのによ。」

どこからか声がしました。二人は、あたりを見回しました。だれもいません。

「上だよ、上。」

二人が上を見るとそこには、漆黒の翼をつけたバイクに乗った悪魔がこちらニヤリと笑いながら見つめていました。

第3話小麦畑の出会い（後書き）

まだまだいろいろな人が登場します。楽しみに。

第4話悪魔（前書き）

小麦畑で話す二人に声をかけたのは、かわった悪魔だった

第4話悪魔

リドルは、驚きのあまり目をグリグリと掻いて（何か変なものを見たような。いや気のせいだ。空に人なんているわけない。そうだ、そうにちがいない。）

頭の中では、いろんなリドルが会議をはじめています。

「放心状態だなこりゃ。そっちの幽霊坊やは、平気みたいだな。」

悪魔は、ストックに目をむけるとニヤリと笑った。

ストックは、またも、幽霊と言われ抗議しようとしたその時、雷がピカ、ゴロゴロズドンつとものすごい音をたててリドルをめがけておちてきました。

「俺は、気が短い。放心状態もそこまでだ。単刀直入に言う。なぜのは、嫌いだからな。俺は、おまえらが気に入った。だからおまえらの夢を手伝ってやる。いやとは、言わせねえ。」

ストックは、悪魔のあまりにも急な話に口があいてしまい、リドルは、雷にうたれて体の中にビリビリ電気がはしって目がクルクルと回ってしまいました。

「そうだ。俺の名前は、ルースだ。よろしくな。ちかいうちまた来る。」

ルースは、手を空にかかげて雷をならし行進曲をガンガンにかけると黒翼のバイクでブーンと飛び去って行きました。

ストックは、まだ呆然として、リドルもまた体に走る電気で立ち上

がることができません。

ただ二人の心の中は、同じことを思っていました。

（悪魔に目をつけられるなんて。まずいことになった。これからどうな）

二人が口をきけるようになったのは、サンサンと輝く太陽がのぼるころでした。

第4話悪魔（後書き）

まだまだ修業中です。よかったら評価と感想をできたらおねがいします。読んでいただきありがとうございます。

第5話 光る森（前書き）

再び小麦畑にでた2人だったのですが・・・

第5話 光る森

次の日の夜、小麦畑で二人は、まず何から始めるかを考えました。

「とりあえず、歩けばいいよね？君には足がないから、足を作ろう。そうだな？とりあえず太めの枝を4本とつる草を探そう。どこかにいいのがあればいいけど。」

リドルはどんな風に足を作ろうかウキウキしていた。

「あそこに森がみえる。君にも見えるかな？」

ストックの指さす方向に薄く霧がかかった森がみえました。

二人は、森に向かうと、入り口らしきところで立ちすくんでいました。

入り口から見た森の中は、木が月の光をさえぎるほどおいしげっていました。

「せえので一緒に入ろうか？」

リドルが目をつむりながら、手をつなごうとしましたが、とおりぬけてしまいました。

「うん。」

ストックは、そんなリドルを見てクスツと笑い、透りぬけたリドルの手に、自分の手をかさね目をつむりスーッと息をすいました。

「せえの」

二人は、大きな掛け声とともに一歩ふみだしました。

目をあげるとさっきは見えなかった一つぶの星のような光と、風もないのに木々がざわざわつと葉をゆらしました。

「こわがつてる場合じゃない。枝とつる草を見つけないと。ここらへんの木は大きすぎる、もっと奥に行ってみよう。光の方へ行けば怖くないし。」

リドルは、光の方に何があるのか気になっていました。ストックは、

木々のざわめきに驚いて、また目を閉じて立ち止まってしまいました。リドルは、ストックに

「大丈夫。行くぞ。」

と、いうと歩き出しました。ストックも怖いながらも目を開けてリドルについていきました。

良い木とつる草のどちらも見つからず、どんどん歩いていくうちにまばゆい光を放つところに二人は出ました。

そこは太陽のような光がさんと輝き、木たちが喜んでいるかのように葉を揺らしていました。

「あ、ちょうど良さそうな木があった。」

リドルはストックに木の横に立ってもらい、ストックの身長より少し高いところで木に印をつけました。

すると、木が急に真っ赤に染まり、枝をぶんぶんとふつたのです。

「あなたたちズーラにいったい何したの？」

2人が後ろをむくと、一人の女の人が立っていた。とてもきれいな人で、白いドレスを着ていて、見たことのないような宝石を身に付けていて、きれいな緑色に光る石のついたステッキを持っていた。

2人はとまどいながらもその人に何をやったのかを話した。女の人はずなずくと、空に向かってステッキをふりあげました。すると、たちまちその木の上だけ雲がもくもくとあらわれ、やがて雨がザーザーと降りました。雨にぬれた木は落ち着いたのか赤みがきえて、元の木に戻りました。女の人は木にニコッと笑うと

「ズーラ。落ち着いた？この子たちは悪気はないみたいだから許してあげて。ほら、あなたたちも謝りなさい。」

女の人に言われて2人はわけもわからないまま木に謝りました。

「さてと一件落着。あ、ごめんね。遅れたけど私は、このルーアス森の番人のリーフル。よろしくね。ちなみにこの木はズーラよ。なんか言いたそうな顔だけど言わないでいいよ。全部答えるから。」リーフルはそう言うと、2人の考えていた質問の答えを全部言ってくれました。2人はリーフルは心が読めることにビックリしました。

ルーアス森は木の楽園であること。木たちには全部に心があり、名前があることを知りました。

2人はリーフルに森に入った理由を話しました。するとリーフルは「木たちにいない枝やつる草がないか聞いてみるわ。」

リーフルはまたステッキを空にかかげると、今度は先の石の光がパ―ツと飛び散ると森の木たちの上に落ちました。2人がそれを見て口をあけてボーっとしていると、リーフルがステッキをおろして耳をすますと

「ちょうどいい枝があつたみたい。風に乗せて送ってもらうわ。」
ドッスンっとな枝が4本ストックの体を通り抜けて落ちた。

「あぶないじゃないか。」

ストックはびっくりして言った。

「ごめん。ちよつと落とすところを間違えたわ。つる草じゃないけどひもなら家にあるわ。そろそろ外の世界は日が昇るころよ。よかったら送るけど?」

リーフルの言ったことに2人はあせりました。

「まずい。気付かれる前にベッドに戻らないと怒られる。」

リドルは怒られることを想像しておびえました。

「僕もそろそろ帰らなくちゃ。」

ストックは眠くなっていました。

「じゃあ決まりね。2人ともここにたつて。あとは風に身をあずければいいから。じゃ、さようなら。」

リーフルは2人にそう言うのとステッキを2人の足に向かって振りました。すると、風が2人の体を高く高くもちあげました。2人が別れを言おうと下を見たときはもうリーフルの姿も、きれいだった光も見えなくなっていた。2人はいろんなことにとまどいながらも楽しい気分で風に乗っていました。リドルは町に帰る途中で眠ってしまいました。

ゴーンゴーンっと町の時計が12時を指したとき、リドルは起きました。

「いつまで寝てるんだ。もう昼だぞ。」

ビングの声にリドルは安心しました。

「昨日のは全部夢だったんだ。」

リドルは急いで着替えていつものようにビングの手伝いをしました。

夜になり、自分の部屋のドアをドキドキしながら開けたが、スト

ックはいなかった。

「やっぱり夢だ。」

ふーっとため息をついてリドルはベッドに入り眠りました。

第5話 光る森（後書き）

久しぶりの投稿です。お待たせしました。

第6話 真夜中の客（前書き）

・
今までのことを夢とおもっていたリドルの前に真夜中の客それは・
・

第6話 真夜中の客

月の光がリドルの部屋を照らした時、変な行進曲を流しながら、黒い翼のつけたバイクにのったあの悪魔ルースがやってきました。

「たしかこの町だよな。とりあえず町の中をとんでさがしてみるか。」

「メモをみながら、ルースはだれかをさがしているようでした。」

リドルはあまりにうるさい行進曲とバイクの音に目を覚まし、窓をのぞくと、町の中をキョロキョロしながらルースがバイクに乗って空をとんでいるので、

「あつまた僕は、夢を見ているんだ。」

リドルは、心に言いきかせてベットにもどろうとすると

「夢じゃねえよ。久しぶりだな。リーフルから手紙とつる草を届けにくれて頼まれたから届けにきてやった。感謝しな。」

リドルは、ルースから手紙とつる草を預かると

「感謝の代わりに血をすこし頂こうかな。」

つとニヤリとルースは、鋭くとがった歯を見せた。

リドルは、一目散にドアへ走りドカーンと大きな音をたてて激突した。

「冗談だよ。大丈夫か？あんまり驚いてるからすこしからかってみただけさ。それに俺は、グルメだからお子ちゃまと男の血には、興味ないから安心しろ。」

ルースがリドルを見て笑っていると下から

「おーいなんかすごい音がしたが大丈夫か？」

ビングの声です。

ルースは、またリドルを見てニヤッと笑うとリドルの声を使っていた。

「大丈夫、ベットから落ちただけだよ。」

リドルは、びっくりして声がだせませんでした。

「そうか。」

ピングは、ルースの声だと知りもせず寝てしまいました。

「ああおもしろかった。そろそろおなかも減ったし美しい乙女のいる町にでもくりだすかな。じゃあまたな。」

つと言つとまた行進曲をながしながらルースは、バイクに乗って月の方へきえていつてしまった。

第6話 真夜中の客（後書き）

やっと更新です。すこしいつもとちがう感じにしあげました。できたら次回も読んでください。

第7話 つる草騒動（前書き）

リーフルが送ってきたのは、とんでもないつる草でした。

第7話 つる草騒動

リドルは、ほっとため息をついた。

そしてベットの上でリーフルからの手紙を読みました。

手紙には、こう書いてありました。

「こんにちは、リドル。つる草を送りました。そのつる草ちょっと攻撃的だからきおつけてね。それと木は、ストックくんがもっているわよ。じゃあがんばってね。追伸、つる草は、ピシッと伸ばすと言っことをきくわ。」

リドルは、首をかしげました。

（攻撃的ってどういうことだろう？）

その時、リドルの足を何かがピシッと攻撃しました。

「痛い。」

見るとリドルの足につる草がヘビの様にニョロニョロと巻きついてピシピシと足を攻撃していました。

リドルは、ビックリしてベットに倒れて気絶してしまいました。

その時、木を持ったストックが窓からスーッと入ってきました。

「なに、つる草と遊んでいるのさ？あつ絡まってとれないのか？」

ストックは、リドルにまきついたつる草を、手慣れた手つきでとるとピシッとのはしくて、クルクルつとまとめて縛りました。

リドルは目を覚まして、その光景に目を丸くしました。

そして、ストックの持っているつる草をビクビクしながら突きましました。

つる草は、さっきまでのことがうその様にただのつる草になっていました。

「さっきから何やってるの？」

ストックは、冷たくリドルを見つめました。

「このつる草、さつきまでへびみたいにニョロニョロしてた。」

つと、ビクビクしながら言うリドルに、ストックは笑いだしました。

「ハッハハそんなわけないじゃないか。」

リドルは、馬鹿にされた気分になり、ストックにリーフルからきた手紙を見せた。読み終わったストックは、青ざめた顔でふるえだしました。

「僕がさつき触ったのは、まだ生きてたってこと。」

ストックは、つる草をリドルの方になげました。

リドルはうまくよけるとつる草は、窓の外に落ちてしまいました。

第7話 つる草騒動（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

まだまだ文章

は、未完成ですが修業しておりますのでご了承ください。

第8話 真夜中の騒動（前書き）

つる草はただのつる草では、なかった！二人は、さてどうしたのやら

第8話 真夜中の騒動

「どうするんだよ？落ちちゃったじゃないか。」

「知らないよ。なげるのが悪いんだろう。」

二人が言い争いをしているとチャリンチャリンと音がするので見てみると町の奥から白くてきれいな光が見えました。よく見ると光の中に白い翼のついた自転車にどっしりと座ったおばさんが乗っていました。

おばさんは、リドルたちの窓の前で止まるとヒョイっとつる草を取りました。

「あんたたち、せつかくこんないいつる草を持っているんだから、捨てるんじゃないわよ。持っていればきつと、いいことがおこるかもよ。」

口をポカーンとあけた二人に、おばさんはつる草を渡すと、クスッと笑い自転車のベルをチャリンチャリンと鳴らすと過ぎ去っていきました。

「なんだったんだろう。まあでも恐いけど、このつる草を使うしかないよな。」

リドルは、決心してつる草を握った。そして、そんなリドルを見てストックはこわいながらも、リドルと一緒につる草を握りました。でも、やっぱり恐かったのか、二人とも手をパツと、放してしまいました。

「さあつる草は、そこにおいという。作りたいものはもう、決まっ

ているんだ

」

リドルは、本棚から古い本を取り出すと、ページをあけてストックに見せました。

「竹馬？」

ストックは見たこともないような乗り物に、ビックリしました。リドルは、ストックの身長よりすこし長めに木を切り、本をみながら不慣れな手つきで竹馬を作りました。

第8話 真夜中の騒動（後書き）

読んでいただきありがとうございますm（――）m まだまだ不慣れな私ですが、何かアドバイスがありましたら、どんどんおねがいします。

第9話 竹馬（前書き）

ついに、竹馬の材料は、そろいました。
さてさてどんな竹馬ができたのでしょうか？

第9話 竹馬

リドルの作った竹馬は、つる草が丈夫で、どんなにのばして縛り付けても、切れませんでした。

足を置くステップの部分は、木の木目がほど良い滑り止めの役割をして、それでいてかかった。

「完成だ！さあ、この本の絵のように乗ってみてくれよ。」

リドルは、できた竹馬をストックに渡すと、キラキラと輝く目でストックを見つめました。

「なんか違う気がするけど、まあいいや。」

ストックはさつと、本の絵を見て竹馬に飛び乗りました。

すると、竹馬はストックを乗せたままドゥーンと、地面へ真っ逆さま。

さすがのビングもその大きな音で飛び起き、リドルの部屋へ行きました。

「リドル、大丈夫だか？」

ビングがリドルの部屋に入ると、ベットの下で頭をさすりながら座っている、リドルの姿を発見しました。

「イタタ、ベットから落ちちゃった。大丈夫、たいした事ないよ。」

ビングは、リドルの頭をさすりました。

「気をつけるだよ。今、氷さ持ってきてやつから。」

リドルは、ビングが部屋を出て行くのを見届けたあと、ベットの下に隠れていたストックに

「今日は、竹馬を持って家に帰って練習！明日、夜に麦畑で会おう。」

そう言つてストックを窓から追い出しました。

そしてそのあとすぐに、冷たい氷の入った水袋を持ってビングがもどってきました。

「窓を開けてると、風邪をひいちゃうぞ。ほれ、頭だせ。」

ビングは窓を閉めると、やさしくリドルの頭に水袋をあてた。

「父さん、もうほんとに大丈夫だから。」

リドルの言うことにビングは、うなずくとリドルの頭をなでて部屋へ戻りました。

リドルはビングの後姿を見ながらいつか、最近起こった不思議な出来事を全部ビングに話そうと思いました。

そうして、リドルは暖かいベッドに入りました。

第9話 竹馬（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

第10話 大騒動（前書き）

竹馬ができた。二人は、いつもの麦畑で会う約束をする。そしてその朝、なにやら外が騒がしです・・・

第10話 大騒動

時計の針が12時をさした頃、

「キヤー」

つと大きな悲鳴が聞こえました。

「なんだ。」

びっくりして飛び起きました。

そして、窓を開けて外を見ると、竹馬がひとりでに歩いては倒れたちそして立ち上がりを繰り返していました。

リドルは、目をこすって見直すとストックが町中で竹馬を練習していました。

町は、

「キヤーキヤー」

つと悲鳴をあげているおばさんや竹馬を前に箒を構えているおじさんもありました。

ストックは、竹馬に集中していて町の人々に囲まれているのにきずいていませんでした。

「なにやってんだ。あいつ。」

リドルは、どうしたらよいのかわかりませんでした。

すると、下からドンドンつとドアをはげしく叩く音が聞こえてきました。

「おーい、ビングさん。」

お隣のティルおじさんです。

「そんな、叩かなくてもわかるよ。ドアが壊れちまう。」

ビングは、ドアを開けた。

「ビング、町にきてくれ変なものがあるんだ。」

それを聞いてビングは、ティルおじさんと一緒に家の裏の町に向かった。

そしてついたビングはその光景に呆然とした。

「ビングさん。おめえさん、さっきの悲鳴聞こえなかったのかい？」
ティルおじさんの問いかけのビングは、首をたてにふった。

それもそのはず、ビングは悲鳴が聞こえたとき、大いびきをかいて
寝ていたのだ。

「こりゃあ、親父の本で見たな。たしか、竹馬だったかなあ。」

ビングは、竹馬を見ながら考えた。

「その竹馬ちゅうのは、ひとりでに動くもんなのか？」

2人は、呆然としてしまった。

そうこうしているうちに、パジャマ姿のリドルが猛スピードで走っ
てきて竹馬を奪っていった。

第10話 大騒動（後書き）

おまたせしました。まだだつづきます。

第11話 竹馬試練（前書き）

竹馬騒動、猛スピードで終わりました。しかしまだまだ竹馬の試練が・・・

第11話 竹馬試練

「今のおまえさんとこのリドルじゃないか？」

ティルおじさんは、首をかしげた。

ビングは、うなずいて何も言わなかった。

その頃、まだリドルは走っていた。

「竹馬返してよ。」

ムツとしながらストックは、リドルを追いかけて飛んでいました。

「町を騒がしといて、何言ってるんだよ。家で練習しろって言ったろ。」

走るのをやめてリドルは、ストックを怒りました。

ストックは、ワーワーっと泣き出しました。

「わかったよ。もういいから、ここで練習しよう。」

リドルはストックをなだめて、竹馬を渡しました。

そしていつのまにかまた、あの小麦畑についていました。

ストックは、鼻をすすりながら竹馬に乗りましたが、すぐに落ちてしまいました。

今度は、リドルが竹馬に乗ってみました。ストックに比べて乗ることもできませんでした。

2人は、何度も竹馬に乗ることに挑戦しました。でも、できませんでした。

リドルの顔と足は、あざやすり傷があちらこちらにできました。

「大丈夫？」

ストックがリドルの傷を見ながら言いました。

「大丈夫。これぐらい平気だよ。ストックこそ大丈夫？」

リドルは少し涙目でストックに笑いかけた。

「ぼくは、怪我することはないから。」

ストックは、さみしそうにしていました。

「そっか。」

リドルは、何を言っただければいいのか、わかりませんでした。

「あーもうじれったいわね。」

2人は、見知らぬ声にビックリして辺りを見回しました。

するとガサガサと小麦畑の中から、小さな七色に光る美しい翼をつけた少女が不機嫌そうな顔でこちらを見つめていました。

第11話 竹馬試練（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

第12話 謎の少女（前書き）

町での騒動のあと、二人は竹馬の練習を始めました。
するとその時、二人の目の前に不思議な少女が現れたのです。

第12話 謎の少女

その少女は、光り輝く赤い翼をつけていた。

「見ていられませんか。竹馬は、飛び乗るものではございません。」

一人で乗れないのなら、二人で協力しなければいけませんわ。いいですこと！

協力ですわよ。」

二人は、少女の話より翼に見とれていました。

少女の翼は、白い純白の翼に変化していました。

「聞いていますの？だから私は人間の相手は、いやだと言ったのよ。じろじろとこの私、シーグルの美しい翼を見るんですもの。・・・」
どうやら少女は、シーグルというらしい。

ぶつぶつと愚痴を言いながら、二人の言葉を待たずに虹色に輝いた翼を広げて飛び去った。

二人は、シーグルの言った「協力」について、考えながら竹馬の練習をはじめた。

考えた結果、リドルが竹馬を持ち、ストックが竹馬に乗ることになりました。

一步、一步進みます。慣れてきたところで、リドルが竹馬を放しました。

するとストックは、地面に一直線に倒れました。

「僕は、大丈夫。続けよう。」

それからなんども、地面に倒れたのにストックは、あきらめませんでした。

そのうち、だんだん怖さがなくなったのか、リドルが支えなくても少しずつ竹馬で歩けるようになりました。

「やったねストック、竹馬に乗れたね。」

飛び跳ねてリドルは、大喜び。

「さあ次は、リドルの番だよ。一緒に竹馬に乗って二人で町を歩こ

うよ。」

二人は、また練習をはじめました。今度は、ストックが竹馬を持ってリドルを支えました。

そして、とうとう二人は竹馬に乗れるようになりました。

「あとは、どうやって町を歩くかだね。」

ふらふらしながら竹馬に乗ったストックが不安な顔をうかべています。

「僕は、ビングに全部話して相談しようと思う。いいかな、ストック？」

決心したようなリドルをストックは、眩しく感じた。

そして、黙ってうなずきました。

二人は、町へ戻っていきました。

第13話 歩く光（前書き）

ビングにすべてを話した二人。
町は、歩けるのか？

第13話 歩く光

家に戻ったリドルは、ストックのことをそして彼の夢を、自分は叶えてやりたいと思っていることを全部話しました。

ビングは、黙って聞いていました。そしてすこし溜め息をつき、リドルの頭をなでました。

「町のみんなに話すのは、明日にしよう。二人とも、今日はもう寝なさい。ストックくんは、リドルと一緒に寝なさい。」

リドルは、ビングの言葉にビックリした。

「父さん、いいの？」

ビングは、大きな声で笑った。

「息子の嘘か真実を言うてるくらいわかるさ。町の皆もそうだよ。おまえは、俺の息子なんだぞ。」

リドルの目に涙が溢れた。

ストックは、目に涙を溜めながらビングに頭を下げました。

そして二人は、明日に備えて眠りにつきました。

窓に光が差し、二人の部屋を太陽が明るく照らしました。

鶏達が鳴き、村の人達もでてきました。

朝のパンを買うもの、隣同士の会話、馬車で急いで出かけるもの、イムル町の朝がはじまります。

「二人とも、起きなさい！ 朝ごはんができたぞう。」

ビングの声に二人は、飛び起きました。

なにしろ、昨日のことで二人は疲れ果てて、ぐっすり寝ていたのです。

起きた二人を待っていたのは、こうばしいふかふかのパン、やわらかいチーズ、あたたかいスープでした。

「さあ食べたら今日は、忙しいぞ。まず、みんなにストックを紹介しないとな。リドル、町の人々を呼んできてくれ。」

ストックは、すこしおめかしをしようか。」

ビングは、にやりと笑うとリドルのよそ行きの服を出して、ストックに着せました。ビングの目から見ると服だけが立っているように見えます。

その間、リドルは町みんなに家に集まるように呼びかけていました。

リドルの家の前は、イムル町の人々でいっぱいになりました。

「みんな、聞いてくれ。」

ビングは、町の人々にストックのことを話しました。

「みずくさいじゃないか、ビング。町みんなは、そこにいるストックを信じるぜ。見えないのが何だ、町を歩きたいなら歩きな。」

町の人々は、ストックに温かい言葉をかけました。

そして、町の人々の協力でストックは、町を竹馬で歩きました。一歩、一歩、歩くたびにストックは、目から涙が溢れました。

「ありがとう、みんな。ありがとう、ビング。ありがとう、リドル。」

小さな声でストックは、そう言い続けるとストックの体は美しい光に包まれ、泡のようになるとはじいて消えていきました。

「ストック、笑ってた。」

リドルとビング、町の人々全員が光に包まれたストックの笑顔を見ました。

「ぼくも、ありがとう。」

リドルは、またストックと会える気がした。

第13話 歩く光（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

結末に色々悩みました。納得のいかない方は、ごめんなさい。でも、またこりずにかきます。

新しい話ができたら、またおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7355a/>

歩く仲間

2010年10月28日06時28分発行